

# 芸術新潮

Geijutsu Shinhwa

2

# 奇想 日本 美術史 の

特集

正統なんてぶっ飛ばせ！



特別対談  
美輪明宏  
×  
千住博



右上/爲永会長がはじめて出会った頃、30代のアイズピリはこうした絵を描いていた。《グランブーク》 1950年代  
 右下/アイズピリの人物画の多くは家族がモデル。これは孫娘。《モニクの肖像》 1990年代  
 左上/南仏のリゾート地の風光を描く。晩年のアイズピリは、さまざまなモチーフを自由に空に浮かべた。《サントロベ》 2000年代



結んだら、画家はその画商としかつながらりを持ちません。画商もまた画家に一生責任を持たなくてはいけない。そういう関係ですから、こちらを描いているところにどんどん入って行って、ここは黄色くしたらとか赤くしたらという具合に注文もつける。それが結果的にうまくいくことが重なる、画家の方でもここはこいつの言うことを聞いておくといいふうになるわけです」

アイズピリはデッサンの画家というよりは色彩の画家だろう。多くの人たちのイメージする作品は、明るい赤や青がまざった80年代以降の絵が主であるに違いない。しかし、爲永氏が出会った頃の作は、カラリストの素質は見せながらもそのトーンは必ずしも明るくはなかった。ただし、やはり同時期に爲永氏が惚れこんだビュッフェのあの鋭角的な暗さとは異なり、メランコリックな中にも人なつかしい叙情性をたたえた画風だった。そこにあるのは、バスケットという出自（本人はパリ生まれではあるが）もかわるのかもしれない。



力強さと円熟味とを兼ね備えた、画家60代の作品。《静物》 1980年代



左/アイズピリと爲永清司会長(当時社長)。1970年代。  
 下/アトリエで作品を前に語りあうアイズピリと爲永氏。1991年。



芸術新潮特別企画

# アイズピリ

## 共に歩んだ画商が語る画家たちの素顔

**イ**ンタヴューの間に何度、「バスケット」という言葉が出てきたことだろうか。「酒を飲むとすぐわかりますよ。ハンカチを振って、バスケットの歌を歌ったり踊ったり始めるから」

こう語るのはギャルリーためながの創業者・爲永清司会長。歌い、そして踊り出すというのは画家のポール・アイズピリ(1919-2016)である。

「私がはじめてパリに行った1957年、ユトリロや藤田嗣治の契約画廊だったペトリデス画廊でアイズピリと知り合いました。その頃の彼の絵で惹かれたのは、花なら花というモチーフを真ん中に一つ置いてそれだけを描くところ。それから赤や黒の使い方。どこか東洋的というか、これは日本人の感覚にも合うなと直感しました」

爲永氏はアイズピリと交流を深め、1969年に自らの画廊を開いて以降は契約画廊となって、日本へそして世界へ、この画家を紹介し続けることになる。

「日本とは異なり、フランスでは一旦契約を

「フランス人は男でも女でも18歳になったら家を出て独立するのが当たり前。でもバスケット人は違う。フランスの中の少数派ということもあって、一族の団結がとても強いのです。アイズピリも、自宅の周囲にどんな土地を買い足して、子どもや孫たちを住まわせて賑やかに暮らしていましたし、バスケットにも家を持っていました。彼の絵は赤や黒が印象的ですが、バスケットの古い家並が実際、赤い壁に黒い梁といった感じだね」

画家と画商は結婚したよつなものと云う爲永氏もまた半ば家族の一員だったということか。そんな二人三脚の歩みの中で、アイズピリの画風は時とともにさまざまな変容を遂げる。たとえば80年代。60代に入ったアイズピリは濃密な色彩と単純で力強い形象に満ちた画風を確立する。一つの円熟の境地だったはずだが、画家と画商はそこにさえずらざる、新たな世界を探索することをやめない。色彩の華やぎはそのままだ、画面は明るさと軽やかさを増し、もはやなにもにもとらわれない自由な遊び心に満ちた晩年様式を開花させるのだ。1人の人間が生涯を絵にささげるとはどういうことか、こんどの回顧展ではその意味を目的に当たりにできるのではないかと、そんな期待がふくらむ。

### 生誕100年 ポール・アイズピリ展

2月14日～3月31日 ▶ ギャルリーためなが  
 メランコリックな叙情性をたたえた30代の初期作から、自在な遊び心にみちた晩年の大作まで、約40点の作品で60年におよぶ画家の歩みをたどる。

住所 ■ 東京都中央区銀座7-5-4  
 電話 ■ 03-3573-5368  
 開廊時間 ■ 10:00～19:00  
 (日祝は11:00～17:00)  
 アクセス ■ 東京メトロ「銀座」駅、JRおよび東京メトロ「新橋」駅より徒歩5分  
 URL ■ www.tamenaga.com